Akita University

特別支援教育における学校コンサルテーションの充実に向けて†
～コンサルタントが抱く困難性と求められる専門性～

武田　篤・斎藤　孝*
秋田大学教育文化学部
新井　敏彦・佐藤　圭吾・藤井　慶博**
秋田県教育庁
神　常雄***
岩手大学教育学部

特別支援教育が本格的にスタートし，教育現場は今，大きな転換期にある．これまで特別な支援の対象とされてこなかった通常の学級で学ぶ発達障害の児童生徒に対しても適切な支援が求められている．これらの児童生徒への支援を充実させるために，特別支援学校のセンター的機能や外部専門家による巡回指導を活用した取り組みが全国的に展開されてきている．しかし，支援にあたる特別支援学校の教師や専門家にとって子どもへの直接的な指導やアセスメント等には慣れていても，学校からの相談依頼を受け，教師や学校への支援を行う学校コンサルテーションはこれまで経験したことがなく，試行錯誤しながら支援にあたっているのが実情である．そこで本研究では，この学校コンサルテーションの充実を図るために，これまで小・中学校等に対して巡回指導を行ったことがある人を対象として，どのような困難や課題を抱いているか，また求められる専門性とはどのようなものかについて，自由記述によるアンケート調査を実施した．内容をKJ法に準じて整理した結果，困難性については「学校側の意識・態度」，「支援のあり方」，「保護者支援」の３つに，また，求められる専門性については，「コーディネート力」，「コンサルティング力」，「支援観と基本姿勢」の３つにカテゴリー化された．これらの結果をもとに，学校コンサルテーションを進める上で求められる留意点と専門性について検討した．

キーワード：特別支援教育，学校コンサルテーション，協働

Ⅰ　はじめに

平成19年度から特別支援教育が本格的にスタートし，通常の学級に在籍する発達障害を含む障害のある子どもたちに対しても適切な支援が求められている．子ども一人一人の教育的ニーズに応じた教育を充実させるためには，これまでのように担任だけにまかせるのではなく，学校全体で支援にあたることが重要となる．また，子どもによっては，外部の関係機関との積極的な連携を図り，発達障害の子どもたちを支援していく体制を構築することが必要となる．これらを実現するために，特別支援学校のセンター的機能による支援や，文部科学省の特別支援教育総合推進事業を活用した外部専門家の巡回指導等によって，地域の小・中学校等への積極的な支援が全国で展開されてきている．しかしながら，これらの支援にあたる特別支援学校の教師や専門家の多くにとって，子どもへの直接的な指導やアセスメント

2013年２月７日受理
† Enhancement of School Consultation in Special Support Education
* Atsushi TAKEDA & Takashi SAITO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University
** Toshihiko ARAI, Keigo SATO & Yoshihiro FUJII, Akita Prefectural Board of Education
*** Tsuneo JIN, Faculty of Education, Iwate University

Akita University

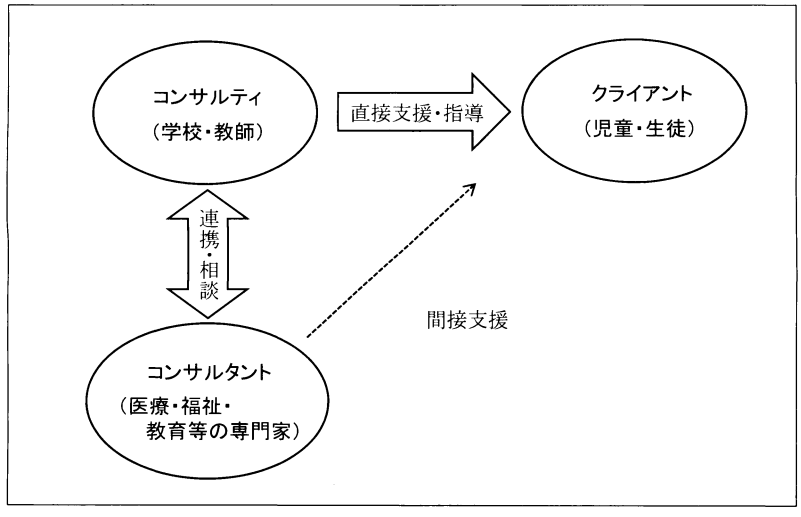

図１　学校コンサルテーション
（国立特別支援教育総合研究所，2007a：一部改変）

にはたけていても，学校からの相談依頼を受け，学校や教師への支援を行うコンサルテーションに関しては経験したことがなく，試行錯誤を繰り返しながら支援にあたってきているのが実情といえる．さらに，松田・芝野（2011）が指摘するように，これまでの特別支援学校のセンター的機能による支援は，ともすれば担任に対する直接的な支援に終始することが多く，学校組織に対するアプローチが不十分であったため，支援方法等が学校の中になかなか蓄積しない現実がある．そのため，今もっとも求められているのは，学校組織に働きかけるコンサルテーションであり，それにより各学校が自校の支援体制を整備し，一人一人の子ども支援に主体的に取り組んでいく力を獲得していくことにある．

このような背景の中で、わが国の特別支援教育において「学校コンサルテーション」ということが，ここ数年急速に注目を集めるようになってきており，教育現場での活用を意図した学校コンサルテーションに関する書籍も複数発刊されてきている（国立特別支援教育総合研究所，2007a，2007b，2010）．国立特別支援教育総合研究所（2007a）によれば，コンサルテーションとは「異なる専門性をもつ複数の者が，援助対象である問題状況について検討し，よりよい援助のあり方について話し合うプロセス」であり，学校コンサルテーションとは「学校の場で行われるコンサルテーション」とされている．図１に学校コンサルテーションの図式を示した．自らの専門性に基づいて他の専門家を援助するものを「コンサルタント」，そして援助を受けるものを「コンサルティ」と呼ぶとされる．この図で留意したいのは，クライアント（児童・生徒）を直接支援したり指導したりするのはあくまで学校や教師であり，コンサルタントは間接的に関わる立場にあることである．コンサルタントは，困難な問題に直面しているコンサルティと連携し，その問題や課題を評価・整理し，解決に向けてコンサルティの力を引き出すことが第一に求められているのである．さらに，コンサルタントは「コンサルティが専門的な知識を身に付けることができるようにマネジメントしたり，コンサルティが抱えている不安に対して他の取り組みなども紹介しながら安心感を与えたり，課題に対する捉え方に関して新たな見方を提案したり，組織・管理上の問題について改善策を検討したり，外部の有効な資源へ繋いだりする」ことも期待されている（国立特別支援教育総合研究所，2007a）．

このように学校コンサルテーションを進めて行く上で，コンサルタントは重要な役割を担うことになるが，現実には特別支援学校をはじめとした教育現場にこのような力量をもった教師や専門家はまだほとんど存在しない．したがって学校コンサルテーションを担いうる力量のあるコンサルタントの養成は急務の課題となっている．そこで本研究では，学

Akita University

表１　巡回指導で抱く困難性

学校側の意識・態度の多様性（15）	
・障害理解の温度差（5）	
・支援の依存（4）	
・問題の所在が教師（3）	
・教師の意識変革の難しさ（3）	
支援のあり方（29）	
・コンサルテーションの難しさ（8）	
・子どもへの支援方法（8）	
・教師への支援（4）	
・継続的支援の難しさ（4）	
・他機関との連携（3）	
・その他（2）	
保護者支援のあり方（9）	
・障害理解，受容の難しさ（3）	
・問題の所在が保護者（3）	
・学校と保護者の対立，調整(3)	

校コンサルテーションの一層の充実を図ることを目的に，これまで地域の小・中学校等に対して実際に巡回指導を行った経験のある人を対象として，どのようなことに困難や課題を抱いているかを明らかにするとともに，コンサルタントに求められる専門性とはどのようなものかについて検討することとした．

Ⅱ　対象と方法

特別支援教育総合推進事業の一つとしてＡ県Ｃ地区において，幼稚園・保育所，小・中学校，高等学校への巡回指導を行うために組織された「専門家・支援チーム」の一員として，実際に巡回指導にあたったことのある26名を対象とした．対象者の内訳は医師，大学教員，社会福祉士が各1名，残りは特別支援学校の教員を中心とした教育関係者（指導主事等を含む）であった．巡回指導を行う中で感じた困難や課題,及びどのような専門性が求められているかを明らかにするために，平成24年2月に自由記述によるアンケート調査を実施した．アンケートは年度末に開催された「専門家・支援チーム」会議の中で実施され，回答は25名から寄せられた．内容はKJ法に準じてカテゴリー化し検討した．

Ⅲ　結果

１　巡回指導で抱く困難性

巡回指導で抱く困難性や課題について，自由記述の内容を分析したところ，総ラベル数は53枚となった．これらは，大きく【学校側の意識・態度の多様性】,【支援のあり方】,【保護者支援のあり方】の３つのカテゴリーに分類された（表１）．なお，（　）の数字はラベル数を示す．

１）学校側の意識・態度の多様性

このカテゴリーでまずあげられたのは，学校側の障害理解に関する温度差である．たとえば「管理職がどれだけ理解しているかで，学校全体の雰囲気が大きく左右されてしまう」ことや，「一般に小学校に比べ中学校では特別支援教育への関心や理解が乏しい」ことなどがあげられた．また支援に関しては「要請のあった学校で何らかの手立てを講じていてそれが妥当か否か，それ以外の手立てはないかといった場合は支援の道を開きやすいが，その子をどうしたらよいかと丸投げされてしまうと困ってしまう」というものや「専門家として支援すればするほど，逆に自分たちは素人だからと依存を強め，自らの責任を放棄してしまう」といったことが指摘された．他には，「担任が問題の所在になっているときには，次の一手が打てない」ことがあげられた．さらに「“困った子だ”という見方を“困っているのは子どもだ”というように，教師の意識を変えることはとても難しい」といったこともあげられた．

２）支援のあり方

コンサルテーションの難しさに関しては「自分が子どもを直接指導するのであればできるものでも，それを学校や担任に取り組んでもらえるよう具体的に提案していくことはとても難しい」という意見の一方で，「自分の意見がそのまま受け入れられ取組になっていくのは喜びだが，自分一人の意見や考えでよいのだろうかと不安に思うことがある」といった意見もみられた．子どもへの支援方法では「パニックがすごい，すぐキレる，字が書けない，人の話をきけない．どうしたら治りますかと，まるで医者が処方箋を書くように対症療法的な答えを求められ，子どもの実態や背景を探りましょうといっても通じない」といった教師の無理解や過大な要求があげられた．また担任への支援に関しては「遠回しに言うと伝わらず，直接的に言うと傷つき，やる気が失われかねない」難しさが指摘された．他には，「継続

Akita University

表２　求められる専門性

コーディネート力（9）	
・関係者の調整力（4）	
・支援ネットワークを構築する力（3）	
・情報収集力（2）	
コンサルティング力（50）	
・専門知識とスキル（18）	
・アセスメントと支援プランの立案（18）	
・依頼者（コンサルティ）との協働（14）	
支援観と基本姿勢（9）	
・支援観（5）	
・支援の基本姿勢（4）	
その他（2）	

的な支援が難しいことが多く，その後どうなったかわからず，自分の助言や提案が有効だったかについて自己評価できない」といった意見も少なからずみられた．

３）保護者支援のあり方

保護者支援では，「保護者に子どもの障害をいかに理解し，受容してもらうか」，さらに「どのようにして前向きに考えられるようにするか」が大きな課題となっていた．さらにケースによっては「問題の所在の本質部分が，子ども本人ではなく家族や保護者にある」こともあり，その場合には「学校だけの支援では限界を感じる」との意見もみられた．また，「学校と保護者が対立し，関係が悪化してから要請される」ことも支援を難しくする大きな要因となっていた．

２　求められる専門性

巡回指導を行う者に求められる専門性について，自由記述の内容を分析したところ，総ラベル数は70枚となった．これらは，大きく【コーディネート力】と【コンサルティング力】，【支援観と基本姿勢】の３つと【その他】に分類された（表２）．

１）コーディネート力

「関係者の調整力」としてあげられたのは，学校と保護者との関係調整や必要に応じて学校と外部機関とをつなげていくことなどである．加えて，単に関係機関につなげるだけでなく，それぞれの機関や人が連携協力しながら持てる力を十分発揮できるような「支援ネットワークを構築する力」が必要とされた．また，外部の関係機関とつながり連携していくためには，地域にある社会資源について精通していることが欠かせず，そのための「情報収集力」が重要であることがあげられた．

２）コンサルティング力

巡回指導を行う際に求められる専門性として圧倒的に多かったのは，コンサルティング力で総ラベル数の７割以上を占めた．その内訳は，「専門知識とスキル」と「アセスメントと支援プランの立案」がともに18ラベル，さらに「依頼者（コンサルティ）との協働」が14ラベルであった．

「専門知識とスキル」の具体的内容をみてみると「発達障害に関する知識」や「カウンセリング力」，「わかりやすく伝える力」，「必要とされる支援内容を整理できること」，「子どもや教師の力をうまく引き出す力」さらに「実践経験に裏打ちされた長期的視点に立った発達や支援を見通す力」などがあげられた．

「アセスメントと支援プランの立案」では，単に「知能検査等の測定」や「対象児の的確な評価」だけでなく，「子どもをとりまく環境要因(物理的・人的)も含めて総合的に評価」し，「できること，やれることを見つけ」，場合によっては「その学校が持っているリソースをどのようにすればうまく活用できるか」について具体的に提案したり，さらに「取り組む課題をしぼり，優先順位をつけられる」ことがあげられた．そしてなによりも継続した支援が重要で「定期的な評価による見直しによりプランを修正し，それを関係者で共通理解し取り組める」ようにしていく力が求められていた．

「依頼者（コンサルティ）との協働」では，「○○すべきとアドバイスするのではなく，問題や課題を改善・解決するために，何が必要かを一緒に考えていくスタンス」こそが大事であり，可能な限り「方策を相手から引き出し」，「学校が主体的に取組める働きかけ」や「それぞれの人や機関が持っている力を各自が十分出せるように調整」し，それによって「各学校が自力で解決し，達成感を得られるようにしていく」姿勢を堅持すること，いいかえれば「学校が自立していけるように育てていく」ことが求められていた．

３）支援観と基本姿勢

Akita University

「支援観」としては，「“専門性”というものは特定の人や機関だけが持っているものではなく，保護者であれ，教師であれ，医師であれ，当たり前に持っているものの応用であることを知ってもらう」ことや「本人，保護者，支援者，それぞれがエンパワメントしていくこと」の重要性があげられた．また，「基本姿勢」としては，「信頼関係を築ける豊かな人間性」や「相手に応じた柔軟性」さらに「他の専門家とも円滑なコミュニケーションや関係をとれる」ことが，コンサルタントの必須の専門性としてあげられた．

Ⅳ　考察

1　学校コンサルテーションの特徴と留意点

今回の調査で多くの人が指摘していたのが，管理職の特別支援教育に対する意識によって学校全体の雰囲気が大きく左右されるということである．齋藤・小川（2006）が「支援体制を実現する上で、特別支援教育に関する管理職の意識や理解は必須のものだ」と指摘しているように，管理職の理解や協力は，学校コンサルテーションを実効性のあるものにしていくための土台や基礎となる重要な要因であり，そのことを常に念頭に置きながら支援にあたっていくことが求められている．

また，学校コンサルテーションにあたるものは，学校という職場や教師集団の特質ということも十分理解しておくことが必要とされる．淵上（1995）によれば，教師集団は，他の職場と違って教師同士に職務上の緊密な結びつきが少なく，教師個々の独立性と分離性が保たれているという特徴をもつとされる．すなわち，教師個々の自立性が保障され，学級経営や教科指導に関しては，教師の専門的な能力に基づいた独自性が尊重されているという．このような職種上の特徴をもつことから，大山・廣澤（2008）は，一般に教師は援助を受けることに慣れていないため，ともすれば一人で問題を抱え込んでしまいやすいことを指摘している．昨今の教育現場では教師一人の力だけでは解決しえないことも多いことから，教師同士の積極的な連携とネットワークによる協働で，援助し援助される関係を体得していくことがぜひとも必要であるとしている．これを実現するためには，単に個々の教師の意識改革に求めるだけでは不十分であり，援助を受けることに消極的な教師であってもネットワークの中に必然的に加わっていく仕組みを構築していくことが必要との提言を行っている．したがって，コンサルタントは個々の具体的な支援方法だけでなく，教師同士が協働し，互いに支え合う関係をいかにしてつくり出していくか，いいかえれば，校内の支援体制をどのように整備・充実させていくかということにも十分配慮していくことが求められている．

2　相手の力を引き出す「協働」

巡回指導を行うものに求められる専門性として最も多くあげられたものは，コンサルティング力であった．その内容としては，「専門知識やスキル」，「アセスメントと支援プランの立案」，さらに「依頼者（コンサルティ）との協働」の３つであった．このうち「専門知識やスキル」と「アセスメントと支援プランの立案」の２つは，特別支援教育に携わる教師であれば，誰にでも必須とされる専門性といえる．しかし，「依頼者（コンサルティ）との協働」に関しては，特別支援教育を専門とする教師といえどもこれまで経験したことのない領域である．そこで以下に，この「協働」と言うことを中心に考察を加えてみたい．

これまで教育現場は，どちらかといえば閉じられた環境で，部外者が学校の中に入り込んでいくことはほとんどなかったと言ってよい．先に，教師は一般に援助を受ける事や協働して課題解決にあたることに慣れていない点を指摘したが，学校という組織にとっても同様なことがいえる．では，一般の教師が学校コンサルテーションに抱いているイメージは，どのようなものであろうか．ウォール・服巻（2010）は，一般の人が抱くコンサルテーションのイメージを図２のように示している．この図にあるように先生（コンサルティ）が，担任する子どもに問題が生じたために「助けて」と援助を求めたとする．すると，コンサルタントが問題解決の答えが入った鞄を携えて空から降りてきて，まるでスーパーマンのように解決してくれる．ここで留意しなければならないのは，コンサルテーションに対してこのようなイメージを抱いているのは教師だけでなく，多くの管理職も同様のイメージをもっているということである．したがって，学校コンサルテーションにあたるコンサルタントは，管理職も含め教師は，自分たちをこのような目で見ているのだということをまず自覚しておく必要がある．そして，このことを十分認識した上で，学校と協働して問題解決にあた

Akita University

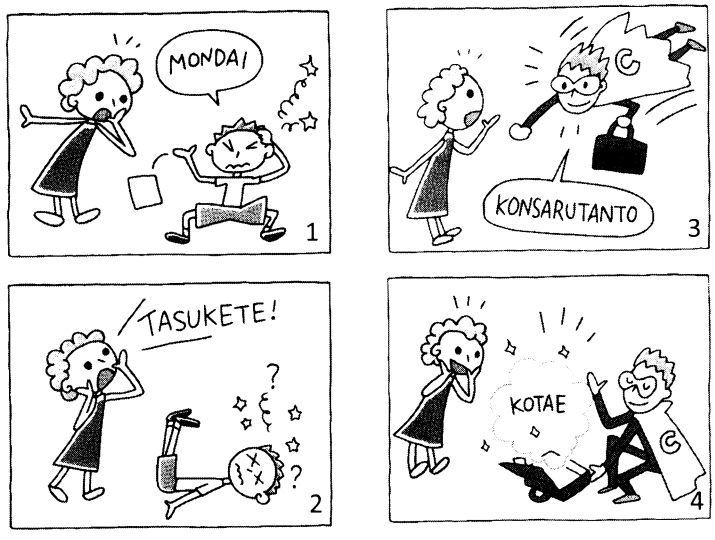

図2　一般の人が持っているコンサルタントのイメージ
（ウォール・服巻，2010：一部改変）

る姿勢を保持することがなにより大切である．コンサルタントはスーパーマンのように問題を解決するのではなく，自分が来る前よりも学校（コンサルティ）がうまくやれるように協働していくことこそが大切だということを決して忘れてはならない．コンサルタントは，様々なケースの問題を解決するための方法やスキルを提供するだけでなく，相手から力を引き出し，主体的に取り組めるよう自立に向けた支援を行っていくことが最終的な目標となっていることを自覚し、研鑽を積んで行くことが求められている．

文　献

淵上克義（1995）：学校が変わる心理学～学校改善のために～．ナカニシヤ出版

ジャック・ウォール・服巻智子（2010）：ジャック・ウォール博士のコンサルテーションの極意～TEACCH学校コンサルテーションのノウハウに学ぶ．ASDヴィレッジ出版

国立特別支援教育総合研究所（2007a）：学校コンサルテーションブックその1　学校コンサルテーションを進めるためのガイドブック～コンサルタント必携～．ジアース教育新社

国立特別支援教育総合研究所（2007b）：学校コンサルテーションブックその2　学校コンサルテーションケースブック～実践事例から学ぶ～．ジアース教育新社

国立特別支援教育総合研究所（2010）：学校コンサルテーションブックその3　特別支援教育を推進するための地域サポートブック～実践から学ぶ～．ジアース教育新社

大山卓・廣澤愛子（2008）：特別支援教育におけるコンサルテーションについての一考察～アスペルガー障害の子どもへの環境調整による不適応改善と描画の変化について～．愛知教育大学教育実践総合センター紀要，11．319-325.

松田真一・芝野稔（2011）：特別支援教育における学校コンサルテーションの在り方に関する研究～これから望まれる学校支援～．平成22年度高知県教育センター研究報告書，1-7.

齋藤英明・小川巌（2006）：特別支援教育のための学校コンサルテーションに関する初発的研究．島根大学教育学部附属教育支援センター紀要，5．55-67.

Summary

Enhancement of School Consultation in Special Support Education

Atsushi Takeda & Takashi Saito, Faculty of Education and Human Studies, Akita University
Toshihiko Arai, Keigo Sato & Yoshihiro Fujii,

Akita University

Akita Prefectural Board of Education
Tsuneo Jin, Faculty of Education, Iwate University

The special support education system started, and schools are facing a major turning point. Schoolchildren with developmental disorders who had attended normal classes and who were excluded from the special support program in the past must now be given appropriate support. In the drive to upgrade support to these children, efforts to make use of the functions of special support schools as a center of special education and the itinerate support provided by professional teams are being carried out throughout the country. However, these teachers of special support schools and specialists usually have no experience in such school consultation of providing the support requested by schools, and thus do so through trial and error. Aiming to enhance school consultation, in this study a questionnaire survey consisting of open-ended questions was conducted on those who have provided itinerate support to elementary, junior and senior high schools before, asking them to describe freely the difficulties and challenges faced in their experience. The responses were organized with the KJ method. As a result, the difficulties met were found to be "awareness and attitude of school authorities", "ideal support", and "parental support". The expertise required could also be into "coordination ability", "consultation ability", and "views on support and basic attitude". The issues to be addressed in the future were examined, based on the findings.

Keywords : special support education, school consultation, collaboration

(Received February 7, 2013)